

若者が定着する農村社会と和楽居ある集落営農を！ ～一集落一農場を目指す「深渡戸アグリ21生産組合」～

1 深渡戸アグリ21生産組合設立とその背景

深渡戸集落は、総戸数39戸、販売農家25戸、総耕地面積31ha（2005農林センサス）の集落で、水稲単一経営の兼業農家が多い集落です。

平成8年1月、県のソフト事業に於いて「農業の将来の在るべき姿」という課題についてアンケート調査が当集落で実施され、「今後、農業へ積極的に従事しますか」との設問に対して、「いいえ」という回答が多数を占めた経緯があります。

その事業により、その後何度か座談会を重ね、米価下落の中で「新たな作物の導入」や農業機械の投資抑制等、いわゆる「コスト削減」を視野に入れた営農体系へ移行すべきではないかと集落内で結論づけられました。

平成11年度後半、集落の営農推進メンバーの一人が、地域農業へ「集落として取り組まないか」と一念発起、「大豆集団栽培」が提案され、大豆栽培の収支マニュアルや栽培方法、更には集団での経営指針を独自に作成、集落全戸に呼びかけ説明会を重ねました。

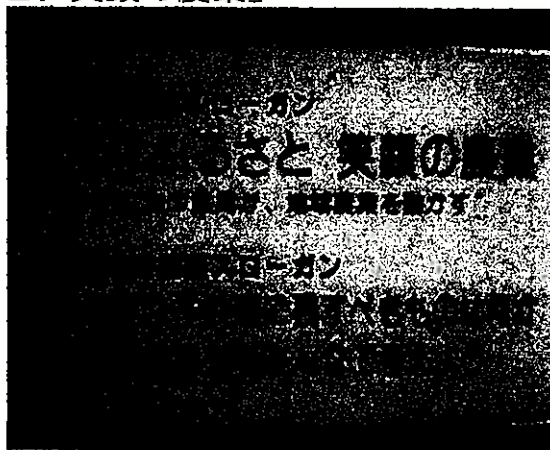
その結果、平成12年3月に大豆生産組合「深渡戸アグリ21」（以下、「アグリ21」という。）が設立し、平成19年4月に「深渡戸アグリ21生産組合」に改称しました。

2 集落営農ビジョン 「豊かなふるさと、笑顔の農業」

「アグリ21」は、それぞれの役割を明確にし、「無理せず、出来る時」を合い言葉に、適時な作業を出来る者がしています。集落内の老若男女を問わずに、可能な出役により労力を日当賃金制で賄っています

この考え方は「子育て等を終えた世代」が中心となって農作業に携わることにより、「今、子育てをしている若者」や「会社勤めが主としている者」でも、安心して集落到に定住出来る環境を整えようとなりました。

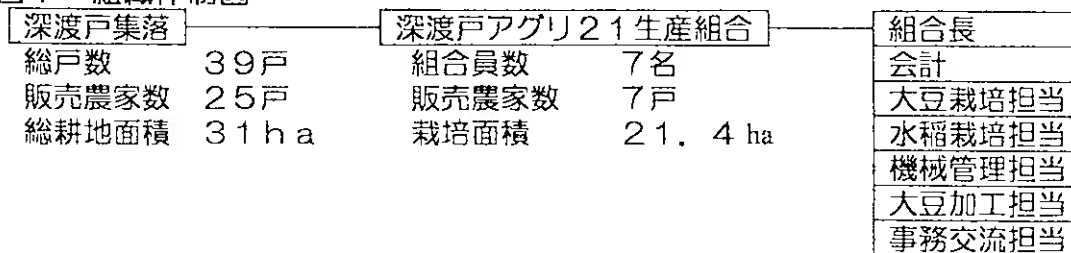
更に、集落営農の意識を高く掲げ、「一集落一農場」を最終目標に、和楽居ある集落営農（共同作業することにより人の集い【和】が出来、そこには笑いや【楽しさ】があり、笑う角には福来たるというような【居心地】が良いという意味）をスローガンとして、農業に取り組もうとスローガンにしました。



集落センターに掲示

3 集落営農の推進体制

図1 組織体制図



<連携組織団体等>

- ・深渡戸稲作研究会
- ・表郷食生活改善グループ
- ・深渡戸農事組合
- ・民間宿泊施設「関の里」

<支援機関団体等>

- ・県南農林事務所
- ・白河市表郷庁舎
- ・JA東西しらかわ

4 活動内容

(1) 「深渡戸集落・一集落一農場」を目指して

平成20年度より「アグリハウス」を活動の拠点として、毎月末に作業スケジュール等を話し合っています。

深渡戸地区集落全体図（ほ場図：別紙参照）を用い、団地化を進め、ブロックローテーションを行うことにより、大豆の連作障害と湿害対策を図り、高品質・高収量の大豆栽培を目指しています。

集落内からも組合活動が認められ、水田受託も増え、大豆の作付面積（H19は7.5ha、20は7.8ha）は年々拡大しています。



生育が旺盛な「タチナガハ」

表1 「アグリ21」の大豆生産推移

年 度	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18
作付面積 (ha)	4.8	4.8	4.9	4.2	4.7	6.5	6.2
生産量 (t)	11.5	9.6	3.7	6.9	7.2	11.8	11.4
単 収 (kg/10a)	240	200	75	165	153	182	184
品 質 (等級)	特定加工 100%	特定加工 100%	特定加工 100%	特定加工 100%	特定加工 100%	県平均132 2等11% 3等85% 特定加工4%	県平均140 2等57% 3等18% 特定加工25% 県平均104

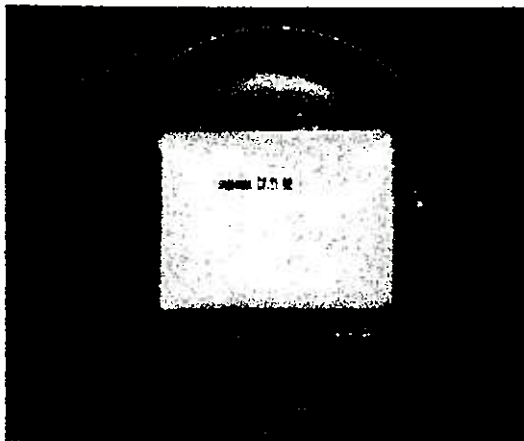
(2) 地産地消の取り組み

「アグリ21」は、活動として生産物にこだわりと楽しみを持ち続けようという意識のもと基本的に取り組み、その一つとして「地産地消」を実践しています。

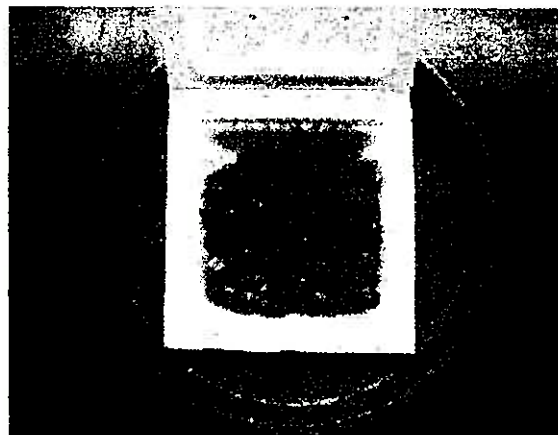
現在、2ヶ月に1度、自分たちが生産した大豆で「豆腐」「納豆」を直売しています。製造加工は地元業者へ委託し、主に地元の人々を中心に注文販売しています。「地元生産の大豆」として、その味を知ってもらおう活動でもあります。

製品に対する評判は良好で、「次の販売はいつ？」と問い合わせがあるなど、リピーターが定着しています。これら消費者の声が聞こえる活動をとおして、組合員は大豆を栽培していることに誇りを抱き、生産意欲の向上にも結びつけています。

現在「大豆」流通については、基本的にJAの流通経路で販売していますが、最近の国産大豆の高い評価を背景に、地元加工業者が今年度から試験的に買い取りを行っています。平成20年産の全量買い取りも視野に入れていきます。



「豆腐」ふくいぶき使用



「納豆」タチナガハ使用

(3) 都市との交流

「アグリ21」では、農業の楽しさと安心・安全な農作物の出来るまでを理解してもらう活動として、都市部との交流も必要と考え取り組んでいます。

旧表郷村時代に埼玉県越谷市と「阿波踊り」を通して交流、それを集落の活性化のためにも活用できないかと考え、以下(表2)の通り活動して来ました。

地域の活性化は人の交流がきっかけを生むと考え、組合としても都市部への農産物の直売にも繋がるものと期待を膨らませています。



表2 都市との交流

H15	夏場に訪れる阿波踊りのメンバーに、表郷の自然を味わってもらうため、採れたての農産物を無償で提供、先方よりお礼の手紙が届きました。
H16	越谷市のお祭りでブースの提供を受け、農産物等を直接販売しました。
H17	東京都の団体(40名)より農村体験をしたいと話があり、稲刈りやさつまいもの収穫、餅つきやイモ煮会を行いました。そこで、美味しいおにぎりを食べてもらったことにより、組合にコメの購入申し込みが届きました。
H18 ～ H19	表郷にある宿泊施設が昨年の交流事業の話聞きつけ、東京都多摩市から落合中学校から修学旅行で約120名を受入れました。稲刈り作業やさつまいも掘り、更には地域の表郷食生活改善グループの協力を得て、地元農産物を使用した餅つきやけんちん汁をふるまいました。
H20	埼玉県戸田市から25名が「大豆栽培」の現状視察として訪れました。

5 集落営農への発展

平成17年秋から、国の施策(経営所得安定対策「品目横断的経営安定対策」等)が大きく変わることを受け、その対応として「アグリ21」で検討しました。

その結果、集落全体には集落営農の理解が深まり、農用地利用改善団体(集落の農業を将来どうしたらよいか話し合える場)の設立と、「アグリ21」自身は、集落営農組織(地域の担い手)になり品目横断的経営安定対策を活用することを、決定しました。

その後、県南農林事務所、白河市表郷庁舎、JA東西しらかわからの支援を受けて、集落での話し合い(座談会等)を重ねてきました。

集落全体に対しては座談会を開催し、集落営農をパンフレットやビデオ上映等でわかりやすく説明。その後アンケート調査を実施し、現状分析の結果をベースに「集落営農を必要としている人が多い」等の認識を共有しました。特に、農用地利用改善団体の設立においては、資料②集落営農イメージ図を用いて集落1戸1戸を回り賛同を得ました。

その結果、平成18年6月には受益者総数27名中26名からの同意を得て、深渡戸地



勉強会での真剣な討議

区農用地利用改善団体が設立しました。

「アグリ21」は集落営農のリーダーとなりつつ、平成17年秋から国の施策（「品目横断的経営安定対策」等）の勉強会を重ね、①施策を活用した場合の助成金の試算表、②集落営農イメージ図（2階建て方式、1階に農用地利用改善団体、2階に受託組織「アグリ21生産組合」；添付資料）、③農用地利用改善団体規約や農用地利用規程の例、④集落全体図（ほ場図：別紙参照）等を用いて、疑問点や課題を1つ1つ解消していきました。そして、6月末には「アグリ21」として品目横断的経営安定対策加入に到達しました。

図2 農用地利用改善団体設立に向けて

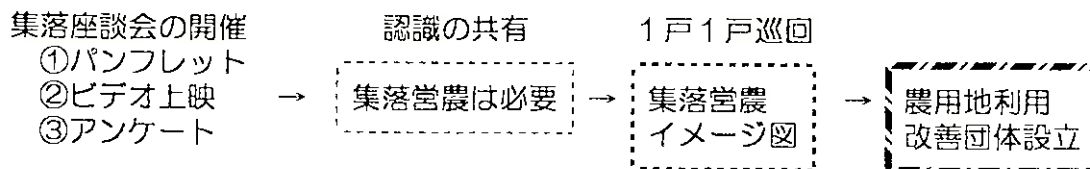


図3 品目横断的経営安定対策加入申請に向けて

「品目横断的経営安定対策」等の勉強会

資料①施策を活用した場合の助成金試算表

②集落営農イメージ図

（2階建て方式、1階に農用地利用改善団体、2階に受託組織「アグリ21」；別紙参照）

③農用地利用改善団体規約や農用地利用規程の例

④集落全体図（ほ場図：別紙参照）

疑問点解消
→→→→→
20 ha クリア

品目横断的経営安定対策加入

6 今後の活動方針

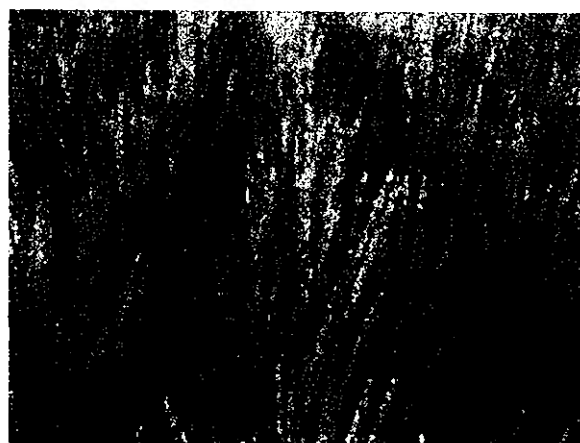
「アグリ21」は、地域の実状を十分に把握した上で、無理なくできることから始め、徐々に進展してきました。

新たな取り組みとして、水稲直播栽培(120a)に取り組んだり、平成19年にはブロッコリー(10a)を、平成20年はサトイモ(12a)を作付けしました。水稲直播栽培については水稲の省力化をねらい、ブロッコリーやサトイモについては集落内の高齢者の生き甲斐と健康維持に繋がりたいと考えています。

今後も、品目横断的経営安定対策を積極的に活用しながら、法人化を目指して活動していきたいと考えています。



ブロッコリー（19年6月5日）



水稲直播栽培（20年8月17日）